# 銀河系は人を知り、そして丸くなった

穂空恵雪

彼女の良き友人は死んだが、それ程心が動かされはしなかったそうだ。

離陸前。翼のパースがバタバタと動かされていた。

その付け根からは、飛行機の内臓が見え隠れしている。

数分前に座席に腰をおろした俺は、無事回り出した車輪に、思わず安堵の息を吐いた。まだ心臓はドクドクと波打っている。

昔から変なところで抜けている、というのは妻の言葉だ。ずっと否定してきたが、そろそろ認めなければならないかもしれない。

空港で少しばかり余裕を持って着いたので、手頃なカフェでお茶をした。そのうちうたた寝をしていたら苛立った声色で、沖縄行きの便番号と俺の名前が繰り返しアナウンスされていて、目が覚めた。

まさに間一髪。この便を逃すと打ち合わせには間に合わない。大口の仕事を逃すところだった。

乗客の視線がチクチクと刺さって痛いが、甘んじて受けなければならない。悪いのは俺である。そうして席に着き、今に至る。

フライトは約二時間、さてどうやって時間を潰そうかと考えていると、右隣から声が掛かった。

あなたが中々来ない早川さんか、と。

生まれてこの方、公共の乗り物で声を掛けられたのは寝過ごした小田急線の車内くらいなものであった。

面食らいつつも、そうだと頷けば、声の主は笑って俺の正直さを好ましいと口にした。

歳の頃は二十代くらいの、サングラスをかけた女性だった。三十路中盤からすると眩しい若さだ。

だが、若さによるものではないだろう、不思議な魅力がある。元来、変わり者に惹かれる質だと自覚している。そういうことだろう。

そこからなんとなく会話は続き、気付けば機内に着陸を知らせる機長の声が響い

ていた。
二時間の会話の中で彼女はこの旅が傷心旅行だと語った。
あまりニュースは見ないので知らなかったが、彼女は最近亡くなった有名な小説家の友人らしい。その死を悼むために、著作の舞台に行くのだとか。
隣に座っただけの男によく語るものだ。余程その友人が大切だったのだろうと思い、そう言うと彼女は曖昧な表情で頬を掻いた。
あまり悲しくはないのだ、と。
それだけ言うと、さっさと手荷物をまとめ出した。
飛行機を降りる後ろ姿に良い旅を、と声を投げると、彼女は振り返る事なく片手を挙げ、白い指先をひらめかせた。
名前も知らない、麗しい人とひと時を過ごせるとは。そういった思いがけない幸運は、配偶者がいるいないや、相手の性別に関わらず喜ぶべきものだ。
今回の仕事はいいものになりそうだ。
いい気分で、百二十分と少しぶりの地面を踏みしめた。

※

預けた荷物を取りに空港を歩く。南国リゾートにラッピングされた土地らしく、周りは家族連れで溢れている。
「悲しい訳ないよねぇ、公世ちゃん」
そんな微笑ましい空気に、あまりに甘ったるく軽薄さと媚びをシロップで煮詰めた声がしなだれかかって来る。
「いおさん、黙って」
それになるべく小さく、素早く応える。精神科の敷居を跨ぐのは御免こうむりたい。
するとこの人はクスクス笑い、意味も無くその場でくるりとターンした。
空　中に投げ出される金髪はその半分が黒く、ズボラさがにじみ出ている。なのに、画になってしまう。そう感じてしまうのが癪だ。
以前だったら通行人にぶつかるからやめろ、と注意したところだが、今は必要がない。
いや、過去何度もこういった事をしても、一度たりともぶつかるようなヘマをしてない事は知っている。変なところで器用なのがとてもムカつくが、そういう事ではない。
「だってねぇ、死んじゃってもずぅっと側に居るもんねぇ」
――彼女が、幽霊だからだ。
スキャンダル多き天才、芝いおがこの世を去ったのは三ヶ月前だ。
享年、三十二。早過ぎる死だった。
芝いおが文壇に現れたのは八年前。大手出版社から出た処女作は、発売するや否や、多くの読者にその衝撃と悲しみと悦びとを与えた。瞬く間に時の人となった彼女は恐るべき速さで作品を次々発表し、その全てが反響を呼んだ。出せば売れる。電車に乗ればドアに彼女の著作のステッカーが貼ってある。
彼女は、間違いなく天才だった。小説は

突き詰めれば個人の趣味。芝いおの著書が肌に合わなかった人間もいたし、人気に大きく比例して大波の様に批判が押し寄せた。

だが、その批判も裏を返せば、芝いおの物語に無関心では居られなかったという事。

一度彼女を追ってしまえば、その終わりまで目を離さずにはいられない。そんな魅力があった。

そして紡ぐ物語の素晴らしさに反し、彼女自身は十人中七人がろくでなしと断定し、残り二人はクズと納得する女だった。あとの一人は全肯定信者だ。

五年間で週刊誌にスッパ抜かれた回数は地獄の閻魔帳も把握していないだろう。彼女の私生活を張れば二日で埃塗れなことが分かるだろう。インタビューなんて受ければ実にテキトーな事言い、虚構の世界で野次馬たちを大変喜ばせた。苛烈な批判の一因がここにあったのは言うまでもない。SNSはデビュー当時こそしていたが、運用して一週間でライン越えと編集に判断され、アカウントは担当管理となったと聞いている。

いおさんの人間的欠点をあげるとキリがないが、とにかく彼女はありとあらゆる事に奔放だった。玉打ちとお馬さんと船をこよなく愛し、愛を注ぎ過ぎて目を剥くような損をよくしていた。

最も叩かれていたのは男女関係だろう。今も昔も、他人の性というのは衆目を集める。下手に目立つ見た目だったのも良くなかった。筆を執る前はキャバクラに勤めていたという職歴も、行儀の悪い書かれ方をしていたと思う。とんだ職業差別だが、彼女に至っては毀損していたのは元職場のイメージだ。素行が悪すぎた。

著名な相手から一般人に及び、人数もバリエーションも豊か。節操の無い彼女の交際関係は、よく吊り革広告のネタになっていた。事実では無い報道もあっただろうが、些細な違いに過ぎない。

八年の月日のなかで、戸籍に付いた三つの×を、さもトロフィーの様に見せて来た時は眩暈がした。

ここで一つ事実を明かそう。

彼女の才能を見出したのは何を隠そう私である。

彼女と初めて会ったのは彼女がデビューする半年前の事であった。

確か、その年にしては珍しい涼しげな夏の日だった。

当時の私は二十二歳で、覚えたばかりのアルコールの世界の奥深さに目を回し、二十三時の相模大野を歩いていた。

私、幹公世（みききみよ）の職業は所謂しがない物書きであり、デビューしたのは十五の時だ。応募した大きい賞で、ありがたい事に受賞作一覧に稚作を連ならせてもらった。

私の若さが話題性になると踏んだ広報により、題名よりデカい15歳の文字が書かれた帯で世間にでた私の本は、これまたありがたい事に、近年の出版不況にしてはなかなか優秀な売り上げを挙げた。

決して、自分の物語だけを百パーセント純粋に評価されたとは思わなかったが、それで筆を折るには、私は現実主義者で打算

的過ぎた。そして何より、自分の話が退屈とも思っていなかったのである。私は、私の書く話が好きだった。

デビューから五年。アパートから呑み歩ける贅沢が許されるくらいには懐は暖かく、その呑み相手にも困らない程の人脈もあった。若さは上手く扱えば愛嬌になる。

まぁ、人生順風満帆といってよかった。最近伸び悩む拙作の売り上げは悩みの種だったが、インターネットでの宣伝活動もあって、専業作家として生きていられるのだ。これ以上のことはなかった。

あの時、あの裏路地に入ってなければ私の華奢な肩に重く幽霊が圧し掛かるなんて事も無く、快適な人生を歩めていただろう。

私の人生を劇的に変えた始まりは、肉と骨が殴打される音だった。

何事かと音のする方に向かえば、一人の少女が男二人から暴力を受けていた。一方的な罵声によると、原因は痴情のもつれの様だった。

それを見た瞬間、体が動いていた気がする。

「こっちです！　お巡りさん！！」

路地の入口から思い切り叫んだ。国家権力万歳。

さぞ暴力沙汰に慣れた暴漢かと思えば、男たちにはどこにも居そうなスーツの中肉中背だった。路地の反対側に駆けていく二人を確認してから、私は少女の手を掴んで路地から飛び出した。

しばらく走ったところで、少女はいきなり笑い出した。当時の私は緊張が弛んだからだと思い、手ごろなベンチに座らせ、その前に屈む。

「怖かったでしょ……大丈夫？」

今なら言える。

そいつはその程度で傷付くような愁傷な玉ではない。

「フフッ、ハハハッ！！　ギャハハ、はぁ……ごめんね。私、君の事全く覚えてないんだけど、いつ遊んだっけ？」

ようやく整った息で少女はそう尋ねた。何がお望み？とでも言いたげな顔に、心外だと思ったのを覚えている。

「私もあなたの事は知らない。それに、ああいったことはよくあるの？」

「ん？いや、あんなヘマ中々しないよぉ。えぇ、っていうかお姉さん何？　ただの善意で助けてくれたの？　徳積んでる尼さんとか？」

こちらの話を躱し、グッと顔を近づけて来る。まだ幼さの残る様子からして、下手したら未成年かもしれない。金に染めた長い髪が揺れた。華やかな顔立ちにさす、赤い血の紅が痛々しかった。

「そんなの人として当たり前！　ねぇ、まだ若いんだからあまり羽目を外すものではないと思う。こんな事会ったばかりの私に……」

「おねーさんおねぇーさぁーん！」

躱した次はブツ切りか。文句を言おうとすると、彼女は満面の笑みで言い放った。

「私、にじゅーよん」

「へ？」

「だからぁ、とっくに親とは縁切れてるし。それに私、お姉さんより年上だよね、多分」

往来に響くほどの大声を上げたのは、許されると思う。その後は一言二言で別れた。

私は、てっきりここで彼女とはもう縁はないと考えていた。小柄で十代にまで見える童顔だとしても、立派な成人女性だ。大人として保護する義務もない。正直、彼女が私より年上だなんて信じられなかったが、角の折れた保険証を見せられては黙るしかない。

再会は随分早く訪れた。衝撃の邂逅から一週間。最近見つけたいい雰囲気のバーに入ると、何やら騒がしかった。

何事かと思えば見覚えのある女が、飲み代を踏み倒そうとしている。思わず天を仰いだ。

彼女は目ざとく私を見つけ、泣きついてきた。英世を三人貸して欲しいらしい。

勿論拒否した。私は彼女の母でも、ましてやマザーテレサの如き高潔な精神の持ち主でもなかった。すると、彼女は苦し紛れにこれをやるから、と言って紙の束を差し出してきた。

受け取れば、それは十数枚のチラシ。裏にはびっしりと文字が書き連ねられていた。

「これは」

「元カレ……あっ、この前君が追い払った奴の片方ね。元カレは両方だけど。が、小説家の卵で。その真似して書いたやつ。生憎もうこれしか持ってるものないの！家賃払えなくて家も追い出されちゃってぇ」

清々しいまでのダメ人間である。いっそそのダメっぷりを展示しツケを払ったら如何だろうかと思ったのを覚えている。

だが、その時の私はネタに困っていて、このダメ人間に金を貸すというのは、得難い体験なのではと思い、その場で適当な借用書を書かせて、三千円を渡した。チラシ紙は受け取ったが、家に帰ってその辺に放った。

確か当時の私は、この出来事をいかに面白おかしく、かつ――自分を好ましい変わり者として書くかを考えてＰＣを起動した。

それから数週間後、そのバーを訪れるとも覚えのある女が声をかけてきた。

「あっ、やっときたぁ」

ひらりと挙げられた手には千円札が三枚握られていた。

返ってくるとは思ってなかった。お金が戻ってきて、私は新たな繋がりを手に入れた。

それからだ。

私と彼女は飲み友達になった。

あれから新しい寄生先を見つけたのか、金をせびる事もなく、私の取り留めのない愚痴を彼女は笑顔でよく聴いていた。キャバクラに勤めていると聞いた時は、こんな接客のようなことを無料でさせているのが申し訳ないと少し、思った。

だがこの時、彼女の存在は私の修飾日記記事の人気ネタになっていた。フォロワーのために、私はこの年上の女と酒を飲んでいた。

大概、私も嫌な奴だ。

そんなある日のことだった。
私は新作の連載の展開に困っていた。困ると言っても大まかな流れは決めていたが、その間のちょっとした話がしっくりこなかったのだ。
「――それで、その主人公は天井に張り付いた虫の死骸を、心底憎い……殺した男の生まれ変わりだと信じて生活するっていう話なんですけど」
世に出た所までのあらすじを簡潔に話し、彼女に意見を求めた。期待は一切していなかった。彼女が案を出したとして、それを採用する気も殆どなかった。
ただ煮詰まった考えを吐き出したかっただけ。正直、彼女を舐めていて、「王様の耳はロバ」と叫ぶ穴程度のつもりだった。
「面白そうなはなしだねぇ」
「そう思うなら雑誌買ってください」
「公世ちゃんがくれるなら読むよ」
「あなた、それ鍋敷きにするでしょ」
あはは、と笑ってカクテルを傾ける彼女を尻目に、自作のことを考えていた時だった。
「私だったら、……そうだな」
目を細めて、少し黄色い歯を覗かせて。彼女は囁いた。
「その人、きっと恋しちゃったんだ。カナブンの死体に。だぁいきらいなやつだってわかってるのに」
気付けば、私は身を乗り出して「それってどういうことですか？」と口にしていた。
それから、店を出て家に帰って、ＰＣの前で私は吐き気を催した。
プロットは練っていた。面白い、と。好きだ、と思っていた。思っていたのに。
「……おえっ」
あの煙草臭い口から語られた物語が、頭から離れなかった。
一晩経って、書類の山から以前貰ったチラシを引っ張りだした。
ご飯も食べずにそれを読んで、私は静かに落涙した。
夕方になってから、私は二日連続でバーに足を向ける。「昨日ぶりだ」とへらへらする彼女を見た瞬間。衝動的に、懇意にしている中で一番やり手の編集者の家を訪ねていた。
片手にはチラシの束、もう片手には事態の飲み込めてない酔っ払いの手を握った状態で、だ。
「深夜にすみません、安住さん。彼女の本が出したいんですけど。いえ！　出さないのは出版界の損失です。間違い、ありません……はい！！」
「うん。とりあえず落ち着こうか幹先生」
さっきまで寝ていたのか、いや寝ていたんだろう。寝間着を着た眠たげな編集者はドウドウと私を制した。担当作家が夜に変なテンションで突撃してきたのだ。怖かっただろう。
安住さんは仕事ができる。何人かの編集者と仕事をしてきたが、彼の手腕は五本の指に入る。彼なら確実に売ってくれるだろうと見込んでの訪問だった。
「ええと、幹先生。そちらの方は？」
「はい！　彼女は、彼女は……」

ここで、私は重大なコミュニケーションの階段を大股ですっ飛ばしていた事に気付いた。そうだ。借用書に書いてもらったけど、ちゃんと見ていなかった。

「……あの、お名前なんでしたっけ」

酔っ払い女性、もとい――芝いおさんは、笑いの渦に沈んだ。

「公世ちゃん、わたしに興味なさすぎ！！」

※

そこからはあっという間。半年後にはご存じの通りだ。

私の見込んだ才能は、私の信用する手腕により日の目をみた。

予想外だったのは二つ。

一つは出会った頃と全く変わらなかった、女神ヘラも匙を投げる男癖。

二つ目はこの大きいクソガキの様な女性と、寝食を共にし、同じ釜の飯を食す様になった事。

当時、いおさんは初原稿料を酒と博打に溶かして、出版社の仮眠室で寝泊まりしていた。そのことを安住さんに聞いた時は眩暈がしたものだ。

社内で流石にそれはまずいとなった時、私が困った居候を引き取ると申し出た。

理由としてはまず、いおさんの小説を読んで彼女のファンになってしまったから。それも滾るマントルの如き熱烈さを伴って。

彼女の本は常に保存用、観賞用、書き込んで考察する用の三冊買ったし、サイン会はほぼ皆勤賞だ。因みに、いおさんは私がサイン会に行く度に腹を抱えて呼吸困難になった。

好きな作家の執筆作業をすぐそばで見られるのだ。これは、いくら信用貨幣をはたこうと値が付けられない贅沢だろう。

あとはそう、単純に困っている知り合いを放って置けなかったのだ。彼女をぞんざいに扱った自覚があったからこそ、後ろめたさは私の首筋に抱き着いていた。

※

目的地の建物に着いた頃には太陽は真上を通り過ぎ、後ほんの数時間で辺りは夜に包まれる時刻だった。

空港に居た頃は聞こえなかった潮の音が耳を撫でる。少し高台にあるその家は、庭からは海を一望でき、何度来てもいい所だ。

ここは私が南国を舞台にした小説を書いた時、取材旅行で滞在時使った民泊。平屋丸々一軒を貸し切れる割に安く、リピートを心に決めていた。

「着いた……疲れた」

「ねぇ～」

少し低い位置にあるプリン頭が、求めてない同意をする。

移動というのは疲れるものだ。開いたドアに足を踏み入れる。いおさんは一足先に屋内に飛び込み、一つしかないベッドにダイブしていた。

「幽霊でも疲れるんですねっ！」

「ホントねぇ～」

言外に速やかな退去を求めたが、この幽

霊が大人しく耳を貸すはずもなく。
「はぁ……買ったお惣菜食べましょ、いおさん」
「いいねいいねぇ～丁度お腹空いてたんだよ～」
ならば別方面からアタックするのみ。
「さぁーたぁーあんだぁぎぃー♪ごーやちゃんぷるぅー♪」
いおさんは、変な歌を歌いながら準備した食器に惣菜をよそう。幽霊の癖に変な話だが、彼女はご飯を食べる。それもとても美味しそうに。生前と変わらないその姿は、彼女が死んだという事実を忘れてしまいそうだ。
「ゴーヤって苦いよねぇ。みんなきっと嫌いだよね」
「そうですかね、私は好きですよ。苦みが味っていうか。もう何年も食べてませんが」
眉を寄せる様は、童顔も相極まって三十路には到底見えない。
私以外に見えない彼女が持つ食器は、他の人から見たら浮いているのだろうか。彼女がこうなってから何度か外食したが、変な顔で見られたことがない。もしかしたら幽霊らしくない彼女が、幽霊らしく心霊的な力を使っているのかもしれない。
「えぇ～この嫌だって気持ちを分かち合いたかったのに」
唇を尖らす姿は本当に感情豊かで、空恐ろしい。
よく自分を見殺しにした相手に、そんな顔が出来るものだ。
「うわぁ、めっちゃ光ってる。公世ちゃん星見よ、星！」
食器を下げた後、いおさんはフラフラと窓辺に寄って目を輝かせた。思い立ったら、と言わんばかりに窓を開け放ち、芝生の上へ素足で飛び降りる。
蚊が入ってしまうと注意するのも野暮だろう。私も開いたままの窓から潮風に身をさらした。
いおさんは庭のど真ん中に寝っ転がっていた。
「凄いねぇ、火星までくっきりだよ」
「えぇ、星がきれいですね」
彼女に倣い青草の上に身を横たえると、視界一杯に何光年前の星々の生きた証が迫っていた。天の川まで細かく見える。
ふと、陳腐な感覚だがこの世界は半径十メートルしかないような気がして、同時に何か言いたいなら、今しかないような強迫観念が襲ってきた。
「小学生くらいの話なんですけどね」
「突然だねぇ」
「私、その時にはもう、打ち上げ花火が下から見たら丸いって知ってたんですよ。クラスの皆は平べったいと思ってて。ほら、そういうドラマあったじゃないですか。アニメ映画にリメイクされてたヤツです」
いおさんからの応答はない。相槌さえも。懐に入れた人には、興味がなかったらトコトン無視する人だ。気にせず続ける。
元より、独白じみているのだから。
「それでですね、そんな私は銀河系も全方向から見ても丸いと思っていたんですよ。そうじゃないって知ったのはかなり後でしたね。それ知った時はめちゃくちゃ恥ずかしくて、もう花火も銀河系も見てやるも

んかって思ったんですよね」
「いま見てるじゃん」
返事が返ってくるとは思わず、少し面食らったが、くすりと笑う。
「えぇ、バッチリ見ちゃってます」
今まで自信満々で信じていたものが、真の正しさでいきなり反転する気持ち。
より優れたモノを前にして、恥ずかしさと無力さで自尊心や自信が致命傷を負う前に、自ら踏みつぶしたくなるような感情。私が、初めて芝いおの物語を読んだ、時。

いつからか創作性及びそれによる作品は、一種の苦みだと思う様になった。
ソレがゴーヤの良さであるみたいに、料理に深みを出すように、お互いの作品を食して、よりいいものを世に生み出していくのだ。
だが、あまりに強すぎる苦みは舌を痺れさせ、鈍らす。
そして、自らの味も分からなくなってしまうのだ。
そんな事も知らずに、高みから気軽に特大の激苦いモンを投げてくる人もいるのだ。
「ねぇ、いおさん。私あなたが憎くて羨ましくて、仕方ないんです」
「そりゃあ初耳」
「えぇ、言ってないです」
私は確かに彼女のファンであるが、それと同時にその才能が怖くて憎らしかった。どう頑張っても、自分の作品をいおさんのそれと比べてしまう。
実際、彼女の短編を読んでからしばらく、書いても書いても生きた心地がしなかった。
ようやく彼女の甘美な苦味に舌が慣れるのに半年かかった。少々彼女の近くに居過ぎたと気付いたのは、その頃であったが、離れようとは思わなかった。
作風と世界観を被らない様にして、どうにかもう一度ペンを握った。それでも、鮮烈な体験は呪いの様に、すぐ傍に。
一番ムカつくのは、いおさん自身がその才能に無頓着な事だ。彼女は金が積まれれば、ゴーストライターだってやるだろう。
私の目の届くうちには、決してそんな事はさせなかったが、確信がある。八年間一番近くで過ごしていたのだ。

私がこんなに焦がれているものを簡単に手放す所が、ダメだ。
そんな地獄の煮釜の焦げ付きの様な感情を少なからず持っていて、それは月日と共に積もっていった。
だから、あの時――いおさんが死んだ時、迷わず手を伸ばせなかった。

※

いおさんが死ぬ前、私達はそれはそれは激しく弁で殴り合っていた。発端は彼女の何気ない一言。
『私そろそろ、書くのやめようかな』
なんでいきなりそんな事言い出したのかは、未だに分からない。実を言うと、彼女の死の前後の記憶が曖昧なのだ。
ハッキリしているのは、いおさんが口喧嘩の末に家をとびだした事。私がその後を

追った事。そして彼女に猛スピードで突っ込む乗用車の影だ。
純粋な事故だったのか、はたまた彼女を狙ったものだったのか、わからない。なにせ敵には困らなかった人だ。
その時ヘッドライトに照らされた影に、手を伸ばそうとしたのだ。素早く動けばまだ十分、間に合った。
でも一瞬、躊躇した。もう私の中の嫉妬とか憧れとか言ったぐちゃぐちゃの感情はグラスからあふれるギリギリが常で、私はずっと苦しかった。
この葛藤から逃れられると、そんな悪魔のささやきに揺さぶられた、耳を傾けてしまった。
結果、私の意識は消え、次に目覚めたのは病院でだった。
白い天井が、警察を名乗る男たちにゾロゾロと囲まれていた。
「お悔み申し上げます」
何が起きたのか全く分からなかったが、その言葉だけ耳に届いた。
「そんな……」
呆然と呟いた自分の声と、
「いやいや、本当に死んじゃったのかい」
気の抜けた声が聞こえた。
「は？」
悲しみの淵に立たされた、と思ったのも束の間。思わず首を回せば、厳つい顔の中に少女の如き顔。
お互いたっぷり見つめあい、ほぼ同時に絶叫した。
こうして、私は見殺しにしてしまった友人に憑かれている。
※
恐ろしくないといえば嘘になる。でも嬉しくないといえば、もっと嘘を重ねる事になる。
ファンでも羨望の的であるのは間違いないが、それ以前に彼女は私の良き友人であるのだ。ある種、相棒とさえ思っている。
そんな相手を亡くしたと思ったら、目の前に現れた。
たとえ、醜い感情をもってして死なせてしまった恨みであろうと、現世に留まってくれて嬉しいと思うのは、間違っているだろうか。
いや、分かっているのだ。間違っている。そんな事ググらずとも小学生だって分かる。この三か月ずっと罪の意識に悩まされていた。
その結果が、今の告白。そして懺悔だ。
「そうかぁ、公世ちゃん私の事が憎いのかぁ～」
私の一世一代の告解は、どこまでも軽い口調で受け止められた。
「えぇ、まぁ。それはもう」
「じゃあさぁ」
オッコイショ、という掛け声と共に上半身を起こす。
「私の事、嫌いなの？」
風に舞う細い黒と金。それに隠れて彼女の表情は読み取れない。
あぁ、幽霊とはかくも美しい。
白い歯が並ぶ口元だけが見える。彼女の収入が安定し始めた時、無理に歯医者に連

れていって良かった。歯が汚い幽霊より綺麗な霊の方が、好みだ。初めて知った自分の嗜好である。
「……そうでしたら、とっくの昔にお祓いになりなんなり行ってますよ」
嫌いになれたら、どんなにいいか。困ったことに、私はこの金遣いが荒くて枠で不躾で自由な年上の友人を得難い者だと思っている。
それこそ、身が張り裂けそうな思いをしても逃げ出さないくらいには。
「じゃあいいじゃん。別に私は構わないよぉ。ずっと近くに居ても」
そう彼女は、何でもない事の様に言うと、振り返ってニヤリと顔を歪めた。
「……なんですかそれ。私、これでも結構勇気だして言ったんですけど。というか！憑いてるのソッチでしょう！？」
「えぇ～あんまりにも熱烈なこと言うからプロポーズかと思ったんだけどぉ？」
「はぁ！？　なんでそう……なんでもかんでも……」
付き合ってられない。芝生から立ち上がる。見事なプリン頭のつむじが見えた。幽霊も髪が伸びるなんてのは、別段知りたくもなかった。
明日にでもその頭をどうにかできないか聞いてみよう。今日はもう、疲れた。
なんだか拍子抜けしてしまったが、心のどっかで安堵している自分もいる。全部が全部、馬鹿々々しい。
結局『このまま』が一番どうしようもなくて、一番落ち着く。
「私もう中入ってますね」
いおさんに背を向け、開いている窓枠に身を滑らした時、声が投げられた。
「そういえば、生きてる間に聞けなかった事一個あるんだけどぉ、聞いていいかしら？」
「……どうぞ」
心臓がバクバクいっている。何だ、何が聞かれる。私はまだ、許されていなかったのか。
「公世ちゃん、随分体格いいけど何かやってたのぉ？」
「……通信講座を受けたんですよ。格闘シーンの描写の参考に」
穏やかな夜、私にだけ聞こえる下品な笑い声が木霊した。

※

今日はお早い搭乗ですね、早川さん。
二度と聞かぬだろうと思っていた声に、素直な驚きを顔に浮かべた。
「いや全く、こんな事あるんですね……もしや席はここで？」
俺の隣の席を指させば、そのもしやだと彼女は微笑んだ。
帰りこそは時間厳守しようと気合いを入れてよかった。妻への良い土産話になりそうだ。なんたって行きも帰りも同じ便、しかも席が隣とは。
只ならぬ縁でもありそうだと言えば、彼女は口説いているのか、と苦笑する。
慌てて左薬指を見せて弁明するも、みっともなく重ねた言葉は冗談だと軽くいなされた。
フライトの間は、行きと同じ様になんて

事のない雑談をした。
詳しい内容はぼかされたが、どうやら亡くなったご友人とは折り合いが付いたようだった。
それはよかったと口にすると、曖昧な風に首を傾げられた。
行きに口にした、悲しくはないという発言だったり、なにか件の友人と彼女の間には複雑な思いがあるようだったが、それは俺の知るところではないだろう。
他愛のない雑談は、実に手際のいい時間泥棒だ。
大きな揺れと共に、無事に着陸した鉄の塊のドアが開く。
荷物をもって席から腰を上げる。今回は俺の方が準備が早く、彼女はまだ席を立つ様子はなかった。
恐らく二度と会わないだろう。なんとなく名残惜しくなり、再会から言いそびれていた事を別れと共に言った。
「それでは、俺はここで。金髪、ちゃんと染め直したんですね」
以前はプリンの様だった彼女の頭髪は、根元までしっかりと染まっていた。
「えぇ、同行人がちゃんとしろって言うものでしてぇ。それでじゃあ、さようなら。またご縁があれば」

※

公世ちゃんが私に劣等感に似た嫉妬を抱いていた事は、随分前から知っていた。それこそ、居候し始めた辺りから。
伊達に渡り鳥の様な生活をしてきた訳じゃない。朝食の目玉焼きの黄身を割る瞬間だったり、歯ブラシのパッケージを破る時だったり。公世ちゃんから向けられる、肌に痛い感情はそんな日常の瞬間に発露していた。
負の感情なんて向けられ慣れていた。なんでもない生活の中に、それが紛れ込んだらもう末期だと経験から悟っていた。こうなると相手が私から離れていくか、暴力なんなりの形をとって飛んでくる。
痛いのは御免だ。
昔から嫌な事があると、私ではない誰かの人生を考えた。空想のなかでは、私はわたしを超えて、どうでもいい他者になる。自分から離れるのは心地いい。どうせしょうもない一生だ。気分がいいことだけしてさっさと上がってしまいたい。
もういいってところまで楽しんだら終わろうと思っていたが、私は貪欲な質でなかなか満たされなかった。南無三、さもありなん。現世の快楽の虜である。
気持ち良くなるには金がかかる。金自体はどうでもいいが、同時に無視もできない。どうしたもんかと思っていた二十四の夏。私は手を引かれたのだった。
この生活を気に入っていた。だからこそ公世ちゃんの激情には落胆した。
空想を書き起こすだけでお金が貰える美味しい仕事を手に入れたのに、残念だと感じ――八年の月日が経っていた。
いつまでも痛いことはされないし、むしろ世話を焼かれていた。
過去の男に絡まれた時は私を庇ったし、

私が受けたバッシングに、私以上に胸を痛めていた。炎上なんて注目されて印税が入るし、よく分からないが熱烈なファンがつく。一長一短なのに、彼女はわざわざパブリックサーチをしては悲しそうな顔をした。憎い奴が悪口を言われているのだ。もっと喜べばいいのに。

かといって、向けられる激情は消えておらず、なんなら増幅さえしていた。

初めの二年くらいは理解出来なく、気持ち悪さを感じていたが、そのうち気付いた。なんて事ない。幹公世はどこまでもお人好しで。

どこまでも私が好きなのだ。

私みたいな女突き放して、その要らん苦悩から逃げればいいのに、下手に情でも湧いたからいつまでも苦しんでいる。

そうと気付けば、遠慮はいらない。

なんたって此方からすれば、良いことずくめだ。家賃も浮くし、ご飯も出てくる。変なのに絡まれても公世ちゃんがいれば間に入ってくれて安心。たまの過剰な嫉妬など気にしなければ、おつりがくる。

ひとでなしなのは、ティーンエイジャーの時に自覚済みだ。

苛烈なスキャンダルだって、そうすれば話題になるからだ。安住さんだってこのやり方にはなにも言わない。売れればいいのだ。

公世ちゃんは私を天才だと酒に浸るといつも言っていたが、正直彼女の書くものと私が出すものは大差ないと思う。Amazon のレビューは彼女の方が星は多いし。

初見の衝撃を引きずり過ぎてちょっと引く。

そもそも他人の評価なんでどうでもいい。お金がもらえるなら大げさに遊んで見せるくらい訳ない。派手なモラル外行動は『それっぽい』。ぎりぎり人さえ殺さなきゃセーフだ。私が書く本も、私が映ったゴシップ誌も、同じ所から出ているのだ。

流石に、お偉いさんに連れられて行った自然ハーブ系の店で、付き合い購入した乾燥葉っぱ。アレが法改正で違法になった時はちょっとだけ焦ったけども。まぁ『やばい』と思ったのはそれくらいだ。

そう。自分のどうしようもなさを自覚していたし、割り切っていたと思っていたのだが。どうやら私にも一片の情はあった様で。

こういった心の機微を、絆されたというのだろう。他人が苦しむ様に何かを感じたのは、生まれて初めてだった。

それで口にした。公世ちゃんを苦しめているならばやめる、と。

すると彼女は烈火の如くキレ、それに私もキレた。人生初、プレミア箔押しものの気遣いを無碍にされて頭に来たので、家を飛び出した。彼女なら追いかけて来るだろうと思っての行動だったが。

案の定、公世ちゃんは後を追って来た。

人がいい事だと口の中で呟いたその時だった。最高に最低なタイミングで私目掛けて、車が突っ込んで来た。

頬に強烈な光を感じながら、私は公世ちゃんの瞳に殺意が宿るのを見ていた。

黒々しい感情を八年間浴びてきたが、殺

意は初だ。不思議と『まぁいいか』くらいの気持ちで迫りくる死を認識した。
三十二年間それなりに楽しんだものだ、とさえ思っていた。心残りといえば、まだ書き上げてない新刊。印税でＧ１やりたかった。
それと、目の前のお人好しが罪の呵責で責められるだろうに、可哀想だという程度。
だったというのに、次の瞬間突き飛ばされた。
鉄の凶器が女の体にぶち当たる音と、タイヤの焦げる匂い。頭を打った私の意識はそれを最後にプツリと消えた。

病院で死んだはずの公世ちゃんが居るのを見た時は、さしもの私も自分の正気を疑った。
だが、幻覚と言うにはその幻はあまりにも、お節介な年下の友人過ぎた。
それにしても他人の身代わりになってなお、死ぬ間際の殺意に良心が痛み、化けて出るとは。
いかにも彼女らしい。自分のための後悔に余念がない事だ。
公世ちゃんは大人しそうな見た目に反してその実、超絶猪突猛進情緒不安定女なのだ。
自分が生きていて、私が死んでいると思い込んでいる辺りもそうだ。開けられないくせに、ドアや窓も開いていないと入らない。
幽霊に幽霊扱いされるなんて、そうそう出来ない体験だろう。
担当編集の安住さんにだけ少し話したのだが、悲し気に首を振られ、落ち着くまで執筆を休めと言い渡された。『いままで、先生を蔑ろにした売り方をしてすみませんでした』とも言われた。
まぁ、普通の反応だ。それはそれとして、十分バカンスも満喫した事だし、そろそろ復帰しようと思っている。
そんでもって、傍らの公世ちゃんにある提案をしようと考えている。
『家から見つかった未発表作だと言って、作品を書こう。その代わり君も書いて』と。
彼女は、私のファンなのだから、間違いなく同意するだろう。
更に言うと、実は私も幹先生のファンなのだ。
カナブンの死体と同居する話、実はちゃんと紙面で読んでいたよ、って言ったら彼女、どういう顔をするだろう。
残りの人生があと何年だか知らないが、こういう道連れがいるのは、居ないより楽しい一生になるんじゃなかろうか。
そう考えると、思わず軽い笑みが漏れた。
あの日、三千円を返して良かった。ほんとに気まぐれだったのだ。博打は弱いが、たまにはあたるという訳だ。
ひとでなしとはよく言われるが。
あぁ、私も随分と丸くなったものである。

終わり